

【旧約聖書日課】列王記上 10章1～13節

¹シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。²彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来了。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、³ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は何一つなかった。

⁴シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、⁵また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

⁶女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。⁷わたしは、ここに来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。⁸あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。⁹あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

¹⁰彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

¹¹また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。¹²王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための堅琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

¹³ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 3章14～16節

¹⁴わたしは、間もなくあなたのところへ行きたいと思いながら、この手紙を書いています。¹⁵行くのが遅れる場合、神の家でどのように生活すべきかを知ってもらいたいです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。

¹⁶信心の秘められた真理は確かに偉大です。すなわち、
キリストは肉において現れ、
“霊”において義とされ、
天使たちに見られ、
異邦人の間で宣べ伝えられ、
世界中で信じられ、
栄光のうちに上げられた。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章22～26節

²²一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。²³イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。²⁴すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります。」²⁵そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。²⁶イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

「人が見えます」【こども説教のために】

主イエスの時代よりも千年も昔、エルサレムに神殿を建てたソロモン王の評判は世界に知られ、シェバの国からは大量の香料の贈り物を持って女王が訪ねてくるほどでした。ソロモンの名声は、立派な神殿を建てるほどの豊かな富が知られていたからだけではありません。ソロモンは、その知恵によって世界に知られていたのです。その知恵は、彼が王になったときに夢枕に現れられた主なる神に願って与えられたものでした。ソロモンは、王になった自分が人々の訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた（王上 3:11）のです。それは、善も悪も行う人間の姿を正しく見るようになるための知恵でした。

主イエスは、盲人の目を見えるようにしてくださることがありました。ベトサイダの村でも、一人の盲人が連れて来られると、主イエスは彼を村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねくださいました。その盲人は、見えるようになってきたので、「人が見えます」と答えましたが、まだぼんやりしていたのでしょう、「木のようですが、歩いているのが分かります」と言いました。そこで、主イエスがもう一度両手をその目に当ててくださると、今度はよく見えてきて…何でもはっきり見えるようになったのです。

主イエスは、何よりも、人が見えるようにしてくださるのです。人とはどのような者なのか、よく見え、はっきり見えるようにしてくださるのです。

両手を置いて

先週予告したとおり、「こどもの教会（教会学校）」では、今日から 8 月末までの「夏プログラム」で「ソロモン王」を取り上げて活動します。その初日である本日の旧約聖書日課には、ソロモンの名声を伝える箇所が与えられていました。予定していたことでも、仕組んだことでもありません。奉仕者の皆さんが意図せずに計画したスケジュールが、実に不思議なことに、あらかじめ聖書日課によって予定されていたのです。それは偶々のことだと言う方もあるかもしれませんが、わたしは、そうは思いません。なぜならば、ここは「**神の家**」だからです。「**生ける神の教会**」では、そういう不思議な、しかし神がお働きくださるゆえの導きが起こるのです。いいえ、神のお働きは世界中どこでも為されているのですが、**神の家**である教会で、わたしたちは何を気にすることもなく、神が生きてお働きくださっていると信じて、不思議な出来事を主の導きであると証しすることができるのです。

もちろん、わたしたちは、だからと言って、教会の交わりに加えられている自分たちの営みのすべてが善で満たされている、と言うわけではありません。教会の交わりの中で、わたしたちは、神が生きてお働きくださっていることを確かめ合います。今も、わたしたちは神の御前に集い、礼拝にあずかっている者たちです。にもかかわらず、わたしたち一人ひとり、神の御前に立たせていただいている者にふさわしいとは言えないような態度を取ることがあります。同じ礼拝に招かれた者同士なのに、小さな挨拶を交わすことさえせずに済ませてしまうことが、だれにでもあるでしょう。御子キリストのゆえに神を「天の父」とお呼びして祈りの言葉を唱和しながら、互いに対して「神の子」としての敬意を払うことを疎かにしていたりするのです。わたしたちは、「神の家」である教会においてさえ、自分が見たいものばかりを見て、見たくないものは見ないで済ませていたりするのかもしれませんが。だから、ここで神の御前に進み出た者として、わたしたちは、まず罪を告白するようにと教えられているのです。「見えている」と思い上がっている自分の罪を、主に顕わにさせていただかなければなりません。

ベトサイダという村で一人の盲人が癒されたとき、主イエスは、二度にわたってその両手を盲人の目に置かれました。主イエスは、その見えない目をご自身の両手で覆われたのです。「手当て」という言葉があるように、主イエスの手はそのとき、癒しの道具として特別な神癒と言うべき御力を発せられたのかもしれませんが。けれども、そうであれば、それは一度で十分だったでしょう。そのとき、主イエスの両手は、二度繰り返し、その人の目を覆うように差し伸べられました。その目が見えなくされるように覆われました。本当に見るべきものが見えるようになるために、真に目が開かれるために。

見えるようになったらば

盲人の目が癒されたという出来事を聞くたびに、わたしたちは、それが単なる視力の回復という医療的な奇跡の為された出来事ではない、ということに気づかされます。

そのような癒しの奇跡も貴いことです。ときに、それを願いもしますが、皆が叶えられるわけではないのも事実です。それに、自分や身内の者が癒しの奇跡を熱望しないではいられない状態に置かれてもしていなければ、そのようなことは他人ごととしてしか考えられないものです。主イエスが、ただ医療的な奇跡として盲人を癒されたというだけならば、多くの者にとって、この出来事はどれほどの意味があるのでしょうか。

主イエスと弟子たちの一行は、ベトサイダの村に入られるために、湖を舟で渡って来ました。その舟の中で、主イエスは、弟子たちと対話され、彼らが二度にわたって経験した「パンの出来事」の意味を理解していないことを嘆かれたのです（マルコ 8:14～21）。いわく、「まだ、分らないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか」（同 17～18 節）。

弟子たちは皆、少なくとも身体機能に障害はありませんでした。物事の理解に優れた者もいたでしょう。それでも、彼らは、「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか」と問われました。それは、他でもない、主イエスのわたしたちに対する問いでもあり、嘆きでもあるのでしょう。

もちろん、そのように嘆かれる主イエスは、わたしたち皆が「見えるように」なることを願ってくださっているのです。そして、主イエスが両の御手を伸べてくださっても、弟子たちやわたしたちが、すぐには何もかもはつきり見えるようになるわけではないことを、ご存じなのです。ご存じだからこそ、お嘆きになられながら、何度でもその両の御手を、わたしたちのまだよく見えていない目に、よく聞こえていない耳に、置いてくださるのです。

今日も、主イエスは、わたしたちの見えていない目に御手を置いて、「**何か見えるか**」とお尋ねくださっています。神の家である**生ける神の教会**に集められた者たちに、御手で覆われた目で見えるものは何かと、問われます。

「**人が見えます**」と、わたしたちは、ここで答えましょう、「神の子とされるために神の家に集められた人が見えます」と。この人たちは、善も悪も行ってきた者たちです。今も、善よりも悪に傾くことの多い者たちです。しかし、そのような者を「神の子」とされるために、主イエスは「人の子」となられました。「人」とは何者なのか、「人」とは何者になれるのか。その真の姿を見ることができるようにと、この目を開かせてくださるのです。人でありながら、「神の子」の目で見ることができるようになさるのです。